

ご じん や い せき

御陣屋遺跡

市川大門郵便局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023.3

山梨県観光文化部
日本郵便株式会社



御陣屋遺跡上空から、甲府盆地南部を望む（令和4年4月27日撮影）（南方向から北方向を撮影）



御陣屋遺跡 1面目空撮写真（令和4年4月27日撮影）（写真上が北方向）

御陣屋遺跡のあらまし

1.はじめに

御陣屋遺跡は、西八代郡市川三郷町市川大門にある中世から近代にかけての遺跡です。

令和4年度に埋蔵文化財の記録保存のため発掘調査を実施しました。この報告書はその成果をまとめたものです。ここでは、本書を利用する際の手引きとなるよう、発掘調査のあらましを記します。

2. 調査に至るまで

御陣屋遺跡は、市川大門郵便局新築工事の計画を受け山梨県埋蔵文化財センターが令和2年度に実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡です。遺跡名は、小字名から「御陣屋遺跡」としました。調査結果を受けて、工事の事業者である日本郵便株式会社と県観光文化部との遺跡保存についての協議により、可能な限り現地に埋設保存をし、基礎工事によって破壊されてしまう部分のみ発掘調査を行なう運びとなりました。

3. 調査の方法

発掘調査では、試掘調査で得られたデータを基に、重機と人力により掘り下げて、遺構の掘削、遺物等の取り上げを行いました。

各段階において、遺構の実測図化や写真撮影などの記録を取りながら、調査を進めました。出土遺物は、破片が多く、少量でした。それらの位置情報の記録に努め、必要に応じて出土状況写真的撮影を行いました。

発掘調査終了後は、現地で取得した記録データの図化、出土遺物の洗浄、注記、分類、図化等の整理作業を進め、一連の成果をまとめた本書を作成しました。

4. 御陣屋遺跡で発見されたもの

遺跡は周囲を流れる河川が運んだ土砂によって形成された、東西に長い微高地（自然堤防）の南端に位置しています。調査では全部で4面の時代が確認されました。1面目では明治時代以降の製

糸場で使用していたと思われる遺物が発見されました。繭玉から糸を取るための繩糸鍋や糸を撚る集緒器や煉瓦などの遺物と烟跡が見つかりました。2面目では江戸時代後期の陶磁器が見つかりました。3面目と4面目では中世の甕や炉の跡、柱穴などが見つかりました。



出土した中世の甕（かめ）



出土した近代の繩糸鍋（そうしなべ）

5. 御陣屋発掘調査からわかること

御陣屋遺跡の周辺には江戸時代後期に設置された市川代官所跡があります。今回の調査では、2面目の江戸時代後期の層において、いくつかのピットや土坑がみつかりましたが、代官所と直接関わる遺構や遺物は発見されませんでした。

しかし、市川大門市街地の中心部から中世の遺物や遺構が発見されたのは今回初めてとなります。

今後も試掘調査により遺跡の範囲や内容を把握していく必要があります。

序 文

本書は、市川大門郵便局建設工事事業に伴い、2022年度（令和4年度）に実施した御陣屋遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

御陣屋遺跡は、西八代都市川三郷町市川大門にある中世から近代にかけての遺跡です。市川大門地域は江戸時代より富士川舟運の交易によって栄え、市川代官所が置かれたことにより周辺地域の中心地の役割を果たしてきました。今回の調査では、市川代官所に直接関係するものは発見されませんでしたが、甕や皿など中世の出土遺物はこれまで遺跡調査がほとんど及ばなかった市川大門中心地域において貴重な成果となりました。

本書が、今後の御陣屋遺跡の保護、地域の歴史学習や研究のために、多くの方に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書の刊行に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2023年3月

山梨県観光文化部埋蔵文化財センター
所長 西川秀之

例　　言

- 1 本書は西八代郡市川三郷町市川大門に所在する御陣屋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 埋蔵文化財調査は市川大門郵便局建設工事に伴う事前調査であり、日本郵便株式会社から山梨県観光文化部が委託を受け、同部埋蔵文化財センターが令和4年度の期間で発掘調査・整理・報告書作成を実施したものである。
- 3 埋蔵文化財調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体：山梨県観光文化部
調査機関：埋蔵文化財センター

所長：西川秀之　　次長：坂保和博　　調査研究課長：宮里学
担当：副主査・文化財主事 敷野優、文化財主事 内田祥一
発掘作業員：上野五生、笠井哲哉、川住たまみ、高石正雄、平澤直樹、渡辺明一、
渡辺光、渡辺勲（いずれも公益財団法人嶽南広域シルバー人材センター）
整理作業員：渡邊麗子、清水真弓（いずれも会計年度任用職員）
- 4 本書の執筆・編集は内田がおこない、発掘調査における遺構等の写真撮影は敷野・内田が、報告書掲載出土遺物の写真撮影は内田がおこなった。
- 5 発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

発掘調査期間：令和4年3月23日～令和4年5月27日
整理作業期間：令和4年7月1日～令和5年3月17日
- 6 整理作業は山梨県観光文化部埋蔵文化財センターでおこなった。
- 7 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物等は山梨県観光文化部埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 埋蔵文化財調査に係る調整機関は山梨県観光文化部文化振興・文化財課であり、調整担当者は主任・文化財主事熊谷晋祐である。
- 9 埋蔵文化財調査における世界測地形座標に基づく基準点設置及び写真測量、測量図化はシン技術コンサル株式会社に委託した。発掘調査に使用した機材は、光波測距儀はLN150（TOPCON）、遺跡測量システムは遺構くん（Cubic）、デジタル一眼レフカメラはD850（Nikon）を株式会社テクノプランニングから借り上げた。
- 10 埋蔵文化財調査にあたり、次の方々・機関よりご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。
(敬称略、順不同)

〔協力者〕廣瀬宗康（市川三郷町教育委員会生涯学習課）、高林千幸（岡谷蚕糸博物館）、
石井俊光（岡谷市産業振興部ブランド推進室）、相沢哲孝

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。
- 2 出土遺物の注記に用いた遺跡名の略号は全て「GJY」とした。
- 3 調査区は世界測地形座標により設定しており、遺構図版におけるX・Y軸延長線上に付した数値は座標線の数値であり、南北のグリッド線および図中の北印は真北を示す。
- 4 遺構断面図立面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。
- 5 遺物観察表中の（ ）付き数字は次のとおりである。〔土器・陶磁器〕口径・底径・器高：推定値
- 6 遺物実測図中の網目は次のとおりである。〔断面図〕土器・陶器 □ 灰釉陶器 ■ 磁器 ▨
- 7 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2008年版による。
- 8 第1図に使用した地形図は、市川三郷町発行1/2,500都市計画図を使用している。
- 9 第2図に使用した地形図は、国土地理院発行1/25,000地形図「市川大門」を使用している。

目 次

巻頭図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1	第3章 調査の方法と成果	5
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 発掘調査の方法	5
第2節 調査の目的と課題	1	第2節 基本層序	5
第3節 発掘調査の経過	2	第3節 発見した遺構	6
第4節 整理作業等の経過	2	第4節 出土した遺物	17
第2章 遺跡の位置と環境	3	第4章 総括	24
第1節 地理的環境	3	写真図版	25
第2節 歴史的環境	3	報告書抄録・奥付	

図 版 目 次

第1図 調査区位置図	3	第10図 3面目遺構図	15
第2図 周辺遺跡分布図	4	第11図 4面目遺構分布図	16
第3図 基本層序図	5	第12図 4面目遺構図	17
第4図 1面目遺構分布図	8	第13図 1面目出土遺物	19
第5図 1面目遺構図	9	第14図 2面目出土遺物	22
第6図 烟遺構平面図および断面図	11	第15図 3面目出土遺物	22
第7図 2面目遺構分布図	12	第16図 4面目出土遺物	22
第8図 2面目遺構図	13	第17図 令和2年度試掘調査出土遺物	22
第9図 3面目遺構分布図	14		

表 目 次

第1表 発掘調査に係る届出等一覧	1	第5表 鉄製品観察表	23
第2表 御陣屋遺跡周辺遺跡一覧	4	第6表 古銭観察表	23
第3表 陶磁器・土器観察表	23	第7表 令和2年度試掘調査出土遺物観察表	23
第4表 煉瓦観察表	23		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

市川大門郵便局建設工事は、日本郵便株式会社南関東支社が実施する建設事業である。事業予定地は周知の埋蔵文化財の包蔵地外であるが、周辺にある江戸時代後期の市川代官所跡に関連した遺跡が発見される可能性が考えられることから、工事に先立ち山梨県観光文化部埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。試掘調査は、令和2年1月25日から26日に行いその結果、合計3面の遺構面が確認された。1面目は近代以降の遺構が検出された。2面目は江戸時代後期の土器集積が検出され、内側から順にお鉢、天目茶碗、大福茶碗が重なって検出された出土状況や、周辺から同種の遺物が発見されなかったことから、地鎮祭などの祭祀的行為に関わる可能性がある。3面目は中世に属する土師器片を主とする遺物包含層が確認された。試掘調査の結果を受けて、周知の埋蔵文化財包蔵地「御陣屋遺跡」として遺跡台帳に新規登録した。1面目及び2面目は江戸時代以降に属する遺構面であるが、1面目については、近代以降の市川大門地域の主要産業の一つであった製糸業に関わる遺構や遺物の検出の可能性があり、当時の当該地域の産業を考察する上で重要であると考えられる。また、2面目については支配領域が甲斐国南西部一帯と広大であった市川代官所が近隣に存在しており、代官所とそれを取り巻く市川大門村の歴史を明らかにする事は、甲斐国の近世支配体制を理解する上で重要であると考えられる。以上のことから『山梨県埋蔵文化財事務取扱要綱』に基づき、全3面の発掘調査を実施することとした。

発掘調査に当たって、令和2年7月14日および令和4年10月13日に、日本郵便株式会社南関東支社、文化振興・文化財課、埋蔵文化財センターの3者により、遺跡保存に関する協議を実施した。この協議において、1面目では建物基礎範囲全面、2面目以降は柱状改良の深度掘削によって遺跡が破壊されてしまう地点をつなぎ合わせた範囲を発掘調査対象とした。

発掘調査に係る届出等は以下のとおりである。

第1表 発掘調査に係る届出等一覧

年度	日付	文書番号	文書名	発信者	受信者
令和3年	平成3年11月1日		「市川大門郵便局建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」	日本郵便株式会社南関東支社長	山梨県知事
令和3年	平成4年2月15日		「令和3年度市川大門郵便局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書」	日本郵便株式会社南関東支社長	山梨県知事
令和3年	平成4年2月15日	文化第4272号	「埋蔵文化財の発掘調査の実施について」	文化振興・文化財課長	埋蔵文化財センター所長
令和3年	平成4年3月25日	埋文第1368号	「埋蔵文化財発掘の報告について」	埋蔵文化財センター所長	山梨県知事
令和4年	平成4年5月30日	埋文第301号	「埋蔵文化財の発見について」	埋蔵文化財センター所長	山梨県知事
令和4年	平成4年6月30日	文化第1283号	「委託契約書の締結について」	文化振興・文化財課長	埋蔵文化財センター所長
令和4年	平成4年6月30日		「令和4年度市川大門郵便局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(整理作業)委託契約書」	日本郵便株式会社南関東支社長	山梨県知事
令和4年	平成4年7月21日	埋文第507号	「実績報告の提出について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長

第2節 調査の目的と課題

御陣屋遺跡の所在地に隣接している台地には、古代以降の甲斐国の大門寺や源義清が居を構えたとされる伝義清館、延喜式内社の弓削神社といった施設が展開し、近世以降で



昭和初期頃の市川大門町周辺→
右の煙突付きの建物が
平和館秋山製糸場
(市川三郷町教育委員会提供)

は、御陣屋遺跡と同じ微高地上に甲斐国の中西部に支配拠点として設置された市川代官所や当時の町割りが広がっている。こういった歴史的環境を踏まえ、近世の2面目と中世の3面目の調査では当地点の土地利用の実態把握を主目的とした。近隣に存在した市川代官所に関する遺構や遺物等を把握するよう努めた。また、当地点では明治20年から明治43年までは昇進館大寄製糸場が、明治43年から昭和30年代頃にかけて平和館秋山製糸場が操業しており、1



昭和22年の平和館秋山製糸場範囲
(国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス)
※製糸場の各建物の位置や名称は周辺住民の証言による

面目は製糸業に関係する遺構の検出や遺物の出土も想定した。なお、課題として建設工事の掘削範囲の関係から、2面目以降の調査が面的調査ではなくトレーニングとなるため、それぞれのトレーニングの相互関係に注意しながら記録作業を実施することとした。

第3節 発掘調査の経過

発掘調査に先立ち、令和4年3月15日から作業ヤードの仮囲い設置、作業員休憩所、現場事務所等の施設設置、碎石敷きし、発電機等の機材搬入を行った。3月23日から0.25クラスバックホーを用いて表土の掘削を開始し、25日の掘削後に重機を搬出して表土掘削を終了した。4月4日には発掘作業員8名により周辺環境整備後、4月5日から人力による掘削及び調査作業に着手した。第1面の遺構精査、遺構検出及び記録等作業を随時進め、遺構精査に当たっては人力により約10cmの掘削を行った。遺構の調査、記録等作業は4月26日までに終了し、同27日には空中写真撮影を行った。その後、追加掘削調査等を行い、4月28日からは順次6か所のトレーニング掘削を0.14クラスバックホーおよび人力で実施した。当初計画では各トレーニングで第2面及び3面の調査を実施する予定だったが、調査中により下層から第4面が確認されたため、追加で調査を実施した。各トレーニングの遺構の調査、記録等作業を順次実施し、写真撮影は職員による手持ちのカメラにて対応した。埋め戻しは0.25クラスバックホーを用いて5月23日から開始し、26日までに完了した。並行して5月27日までに仮囲いの撤去及び施設、機材等のリース物品、現場の資材、物品等を完全に搬出して撤収を完了した。

発掘調査にかかった人員は、延べ208人である。調査期間中の稼働可能日数35日間である。今回の発掘調査で出土した遺物量はプラスチック収納箱(縦49.5cm、横34cm、高さ16cm)5箱である。

第4節 整理作業等の経過

基礎的整理作業は、本調査終了後の令和4年7月1日から9月16日まで、報告書刊行に伴う本格的整理作業は令和4年10月11日から令和5年1月31日まで、基礎的整理・本格的整理共に各2名の整理作業員を任用し、実施した。基礎的整理は、出土品の洗浄を7月1日から12日、出土品の注記、接合を7月13日から8月9日、出土品の実測・拓本などを8月10日から9月16日まで実施した。本格的整理は、出土品の実測を含め、遺構や遺物、写真的デジタルトレース作業を主に実施した。原稿の執筆や図版のレイアウトを行い、令和5年3月17日に、発掘調査報告書(本書)を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

山梨県は日本列島のうち本州の中央南東に位置している。県の周囲は山地に囲まれており、北部に関東山地、東部に道志山地、東部から南部にかけて御坂山地そして富士山、西部に赤石山脈が連なる。周囲を山々に囲まれた中央に甲府盆地を擁し、その中を笛吹川、日川、荒川、塩川、釜無川などの大河川が南西に向かって流れ、盆地南部で合流し富士川となって駿河湾に流れ出していく。遺跡の所在地である市川三郷町は甲府盆地南部に位置し、二大河川の釜無川と笛吹川が合流して富士川となる地点の東側に位置する。北は笛吹川と沖積地、南には御坂山地があり、その麓に展開する段丘や扇状地上に人口密集地が展開している。

御陣屋遺跡が位置している市川大門地域は御坂山地を発する芦川により形成された扇状地に該当し、扇状地中央を北流する芦川左岸に展開している。明治時代の地形図によると、芦川と笛吹川と釜無川の三河川が市川大門地域の北側で合流しており、芦川の下流域である低地地域は洪水や河川氾濫などの災害が多発した地域である。近世以降に代官所が置かれた旧市街地は扇状地上の周辺より数m標高が高い微高地に形成されており、本遺跡もこの南端に位置する。

第2節 歴史的環境

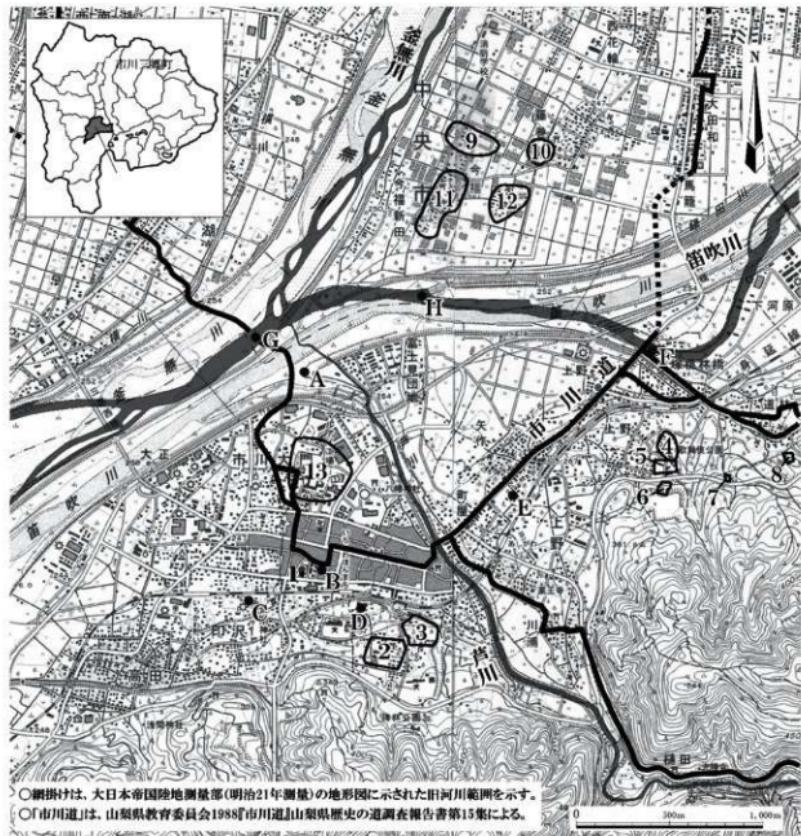
御陣屋遺跡周辺の遺跡分布図を第2図に示した。

既知の遺跡は主に扇状地の縁辺部にある台地上に位置しており、繩文時代から古墳時代までの集落跡が分布している。また、エモン塚古墳や上野古墳群といった古墳も同様に台地上に分布する。古代以降も、甲斐国の天台宗の拠点として知られる平塙寺や延喜式内社の弓削神社といった拠点的施設が台地上に展開する傾向にある。近世には、甲斐国の南西部に支配拠点として設置された市川代官所が扇状地の扇央部に展開する市川大門村に設置されるが、当該範囲は、国土地理院の治水地形分類図によると村全体が自然堤防上に取り、芦川の扇央部でも河川氾濫の危険性が少ない地域を選んでいると考えられる。

また、山梨県立青洲高等学校の建設工事に伴い平成30年度から4回にわたって調査を実施した新町前遺跡は、当該地域では遺跡の空閑地と考えられていた扇央～扇端部にかけて位置している遺跡であり、厚く堆積した砂礫層の下に弥生時代～中世にかけての遺跡が良好な状態で存在していることが判明した。今後は周知の範囲外に遺跡が多数存在する可能性を踏まえ、積極的に埋蔵文化財の有無を確認し、その広がりを把握していく必要がある。



第1図 調査区位置図



第2図 周辺遺跡分布図

第2表 御陣屋遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	備考
1	御陣屋遺跡	中世～近代	集落跡	本書
2	御原敷遺跡	奈良～中世	城跡	市川三郷町教委・山文研 2016
3	平塚跡	平安・中世	城跡	源義清配清の地丘承地
4	上野古墳群	古墳		
5	一条氏館跡遺跡	権文～中世	集落跡	三條町教委 1888, 1991, 1993
6	上野道跡	権文～古墳・中世	集落跡	三條町教委 1989
7	一条林道跡	弥生	集落跡	
8	エモン塚古墳	古墳		
9	今福村東遺跡	近世	散布地	
10	延里道跡	近世	散布地	
11	中道下道跡	近世	散布地	
12	沖村道跡	近世	散布地	
13	新町前遺跡	平安・中世	集落跡	県埋蔵文化財センター

番号	史跡等名称
A	押切湯及び青洲塙
B	市川陣屋
C	弓削神社
D	宝寿院
E	表門神社
F	大塚邑水路新造碑 代官中井清太夫生祠
G	押切の渡し
H	忍の渡し

註)

教委・・・教育委員会

山文研・・・(公財)山梨文化財研究

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

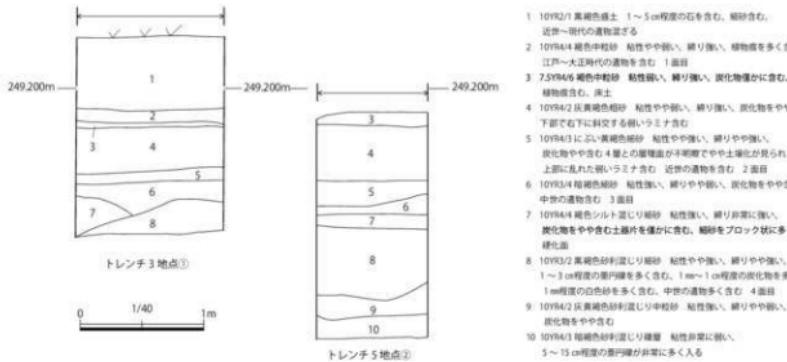
発掘調査は、試掘調査でのデータを基にして、0.25mクラスバックホーにて、表土を遺物包含層上面まで掘削した。発生土は、作業ヤードが狭小である関係から3tクラスタンドブ2台で場外搬出をし、調査期間中に仮置きした。表土掘削完了後、調査区内に5m間隔で方眼杭を設置し、グリッドを設定した。グリッドは世界測地系座標に即して設定し、グリッド名は、北西隅を原点として、X軸方向（南北方向）にアルファベット、Y軸方向にアラビア数字を付した。グリッドによる遺物や遺構の管理は1面目のみに適用した。遺構等の測量に使用する基準点は調査区外に2箇所、水準点は調査区内に1箇所それぞれ任意の位置に設置した。

表土掘削後、人力にて遺物包含層を掘削して遺構の精査を行った。確認した遺構については、「発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -」（文化庁文化財部記念物課監修、奈良文化財研究所編集 2010年同成社）にならない、SN：畑、SP：ピット、SK：土坑といった遺構記号を用いて付番した。なお、付番後に調査を進めていく中で遺構ではないと判断したものもあり、通し番号に一部欠番がある（いずれも1面目：SP-3、7、9・SK-4、5、6、7、8・SL-1、2）。確認した遺構は、半裁して土層の確認を行い、土層断面図の図化及び写真撮影等の記録を行ったのち完掘した。遺構平面図は、原則としてトータルステーションを用いて測量・図化した。出土遺物は、光波測距儀により三次元位置情報を記録して取り上げたほか、グリッド毎に一括して取り上げた。

ドローン撮影による全景写真は、遺構が完掘した状態で上空から撮影を実施した。そのほか、地理的環境、歴史的景観における立地を表現することを目的として、周辺の俯瞰写真撮影も合わせて実施している。

第2節 基本層序

調査で得られた層序を第3図にまとめた。基本層序図を作成したトレンチの地点は第7図に位置を示している。トレンチ3では表土直下の2層上面が1面目の遺構面（近代）となる。耕作土は認められなかったものの3層に水田の床土が形成され、4層は粗砂層で約40cm堆積する。5層の細砂層上面が2面目の遺構面（近世後期）、6層上面の細砂層が3面目の遺構面（中世後期）となる。7層は厚さ10~30cmで上面が硬化しており、ブロック状の細砂を多く含む。硬化面は調査区の北側一部と南側半分で確認できるが中央付近はない。8層の砂利混じり細砂層上面が4面目の遺構面（中世）となり、9層は中粒砂層、10層では完全な礫層となり、わずかな出水を伴う。全体の傾向として土層が調査区北側から南側にかけて緩やかに傾斜しており、微高地の端部であると考えられる。



第3図 基本層序図

第3節 発見した遺構

御陣屋遺跡において発見した遺構は、1面目では土坑（SK）3基、ピット（SP）7基、煙状遺構（SN）1基である。2面目では土坑（SK）1基、ピット（SP）5基、溝状遺構（SD）1条である。3面目では、ピット（SP）5基である。4面目では炉遺構1基、出土土遺構1基である。遺構内から明確に出土した遺物は1面目では数点存在するが、2面目以降では認められなかった。各面の遺物やその出土状況からそれぞれ1面目は近代、2面目は近世後期、3面目は中世後半、4面目は中世であると判断した。

(1) 1面目(近代)

土坑

- ① SK1 (第5-1図) 位置 A-3からA-4グリッド

遺構概要 長さ0.88m、幅1.1mの隅丸方形。掘り込みは0.2m程度。用途・機能は不明である。
出土遺物 煉瓦片や陶磁器など数点出土したが、いずれも小片であり、形態や使用痕跡等の特徴は不明。

- ② SK2 (第5-2図) 位置 D-3グリッド

遺構概要 径0.75m、南北半分が調査区外へ分布するため全体形状は不明である。掘り込みは0.06m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ③ SK3 (第5-2図) 位置 D-4グリッド

遺構概要 径0.75m、南北半分が調査区外へ分布するため全体形状は不明である。掘り込みは0.2m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

ピット

- ① SP1 (第5-1図) 位置 B-2グリッド

遺構概要 径0.3m程度の円形、掘り込みは0.09m程度。用途・機能は不明である。
出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ② SP2 (第5-1図) 位置 B-2グリッド

遺構概要 径0.5m程度の円形、掘り込みは0.05m程度。用途・機能は不明である。
出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ③ SP4 (第5-1図) 位置 B-3グリッド

遺構概要 径0.3m程度の不定形、掘り込みは0.13m程度。用途・機能は不明である。
出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ④ SP5 (第5-1図) 位置 A-3グリッド

遺構概要 長径0.62m、短径0.36mの楕円形、掘り込みは0.18m程度。出土遺物は細かく破損している状態のものが多く、様々な大きさの炭化物が混ざる。用途・機能は不明である。

出土遺物 陶磁器片、煉瓦片が出土したがいずれも小片であり、形態や使用痕跡等の特徴は不明である。

- ⑤ SP6 (第5-1図) 位置 B-2グリッド

遺構概要 長径0.42m、短径0.38mの円形、掘り込みは0.23m程度。出土遺物は細かく破損している状態のものが多く、様々な大きさの炭化物が混ざる。用途・機能は不明である。

出土遺物 繩糸錫片が出土した。(第13図・図版番号3)

- ⑥ SP8 (第5-1図) 位置 A-2グリッド

遺構概要 長径0.40m、短径0.35mの円形、掘り込みは0.06m程度。出土遺物は細かく破損している状態のものが多く、様々な大きさの炭化物が混ざる。用途・機能は不明である。

出土遺物 煉瓦片が出土したがいずれも小片であり、形態や使用痕跡等の特徴は不明である。

- ⑦ SP10 (第5-2図) 位置 B-3グリッド

遺構概要 径0.52m程度の円形、掘り込みは0.18m程度。北東隅に20cmの礫があり、出土遺物は細かく破損している状態のものが多く、様々な大きさの炭化物が混ざる。用途・機能は不明である。

出土遺物 煉瓦片が出土した。(第13図・図版番号8)

煙遺構

- ① SN1 (第6図) 位置 B-3、B-4、C-3、C-4、D-4グリッド

遺構概要 煙の隙間を10条検出した。隙上部は1層により削平されている。隙間の間隔は0.5mから1.2m程度である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(2) 2面目(近世後期)

土坑

- ① SK1(第8図) 位置 トレンチ5

遺構概要 長さ0.88m、幅1.1mの不定形を呈する。掘り込みは0.2m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

ピット(SP1は3面目の遺構と判断)

- ① SP2(第8図) 位置 トレンチ6

遺構概要 径0.32m程度、東半分が調査区外へ分布するため全体形状不明。掘り込みは0.14m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ② SP3(第8図) 位置 トレンチ6

遺構概要 径0.44m程度、西半分が調査区外へ分布するため全体形状不明。掘り込みは0.13m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ③ SP4(第8図) 位置 トレンチ6

遺構概要 径0.44m程度の不定形。掘り込みは0.13m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ④ SP5、6(第8図) 位置 トレンチ5

遺構概要 径0.30m程度の円形。掘り込みはSP5が0.16m、SP6が0.08m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

溝状遺構

- ① SD1(第8図) 位置 トレンチ6

遺構概要 幅0.22m程度、掘り込みは0.14m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(3) 3面目

ピット

- ① SP1(第10図) 位置 トレンチ2

遺構概要 径0.32m程度、掘り込みは0.27cm程度。階段状に径が細くなり(一部3段)、下の最も径が小さい底部分に2cm程度の礫が敷かれることから柱穴と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ② SP7(第10図) 位置 トレンチ5

遺構概要 径0.28m程度、掘り込みは0.27cm程度。2段階で径が細くなることから柱穴と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ③ SP8、9(第10図) 位置 トレンチ5

遺構概要 SP8は径0.30m程度、SP9は径0.12m程度。掘り込みは共に0.1m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

- ④ SP10(第10図) 位置 トレンチ6

遺構概要 径0.3m程度、掘り込みは0.08m程度。用途・機能は不明である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(4) 4面目

炉遺構

- ① SL1(第12図) 位置 トレンチ2

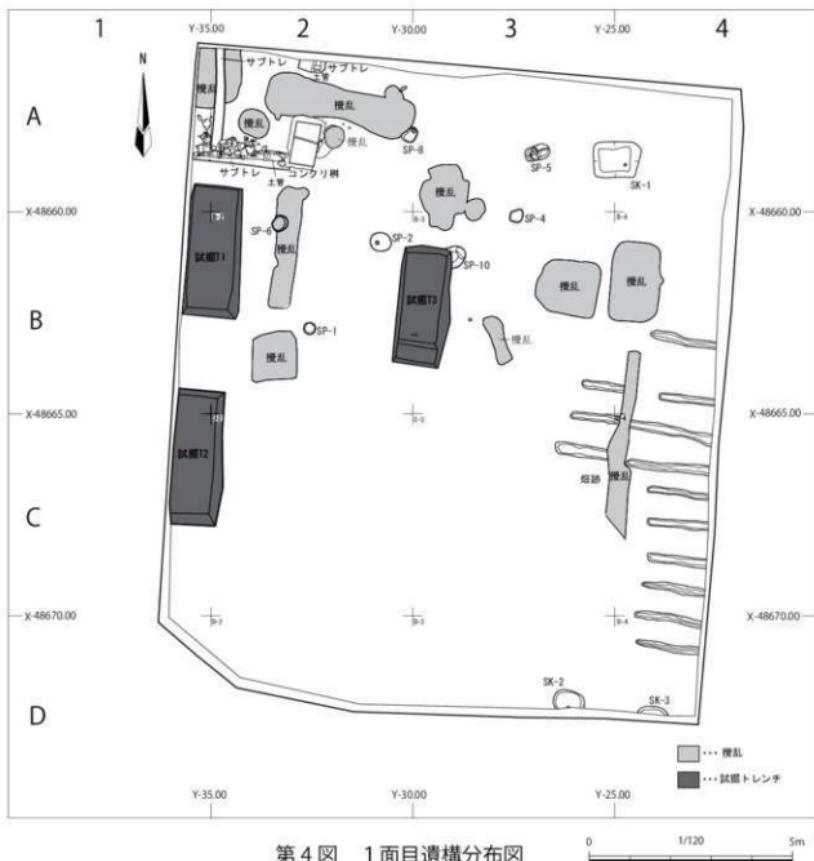
遺構概要 炉跡。10個の石で構成され、幅0.6m程度の馬蹄状をしている。石材に被熱の痕跡はほぼ見られず、焼土も僅かであった。

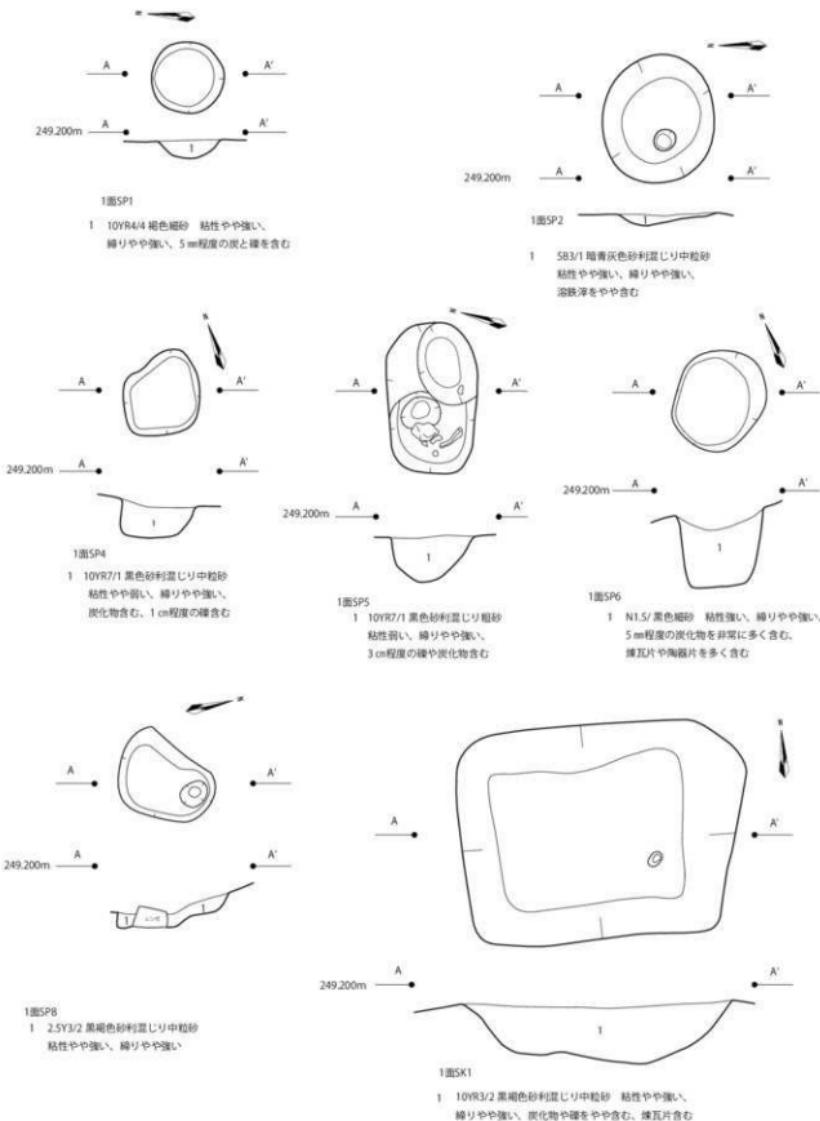
出土遺物 出土遺物 陶器製の香炉と思われる破片(24)が出土した。

甕出土遺構

- ① SX1(第12図) 位置 試掘トレンチ3

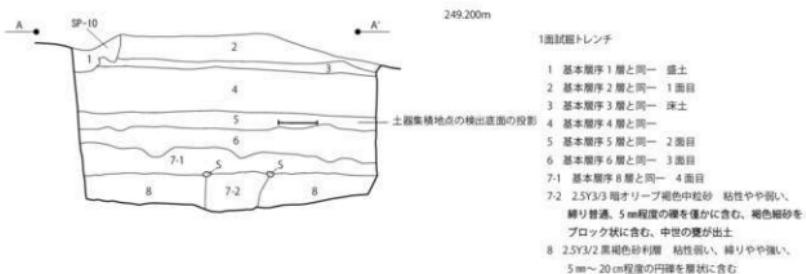
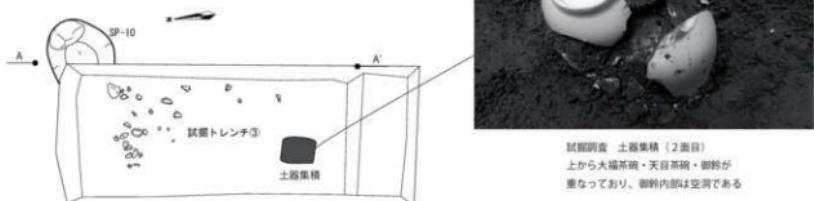
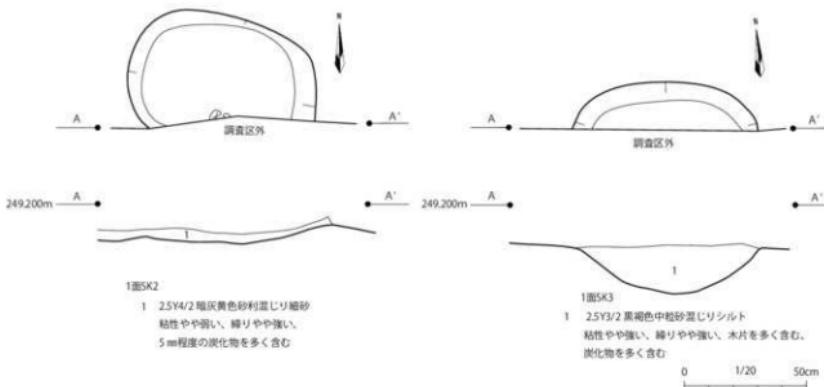
遺構概要 甕の下部と底部の一部が出土。割れた甕の下部に礫が乗った状態で発見された。礫が人為的に安置されたものか自然堆積によるものかは不明。調査中において甕が出土した4面目の土層中に同様の大きさの礫は混じらなかった。発見された礫に何らかの痕跡は見られないものの、出土状況から遺構の一部を構成する可能性を考慮し、本書では遺構として取り扱った。





第5-1図 1面目遺構図

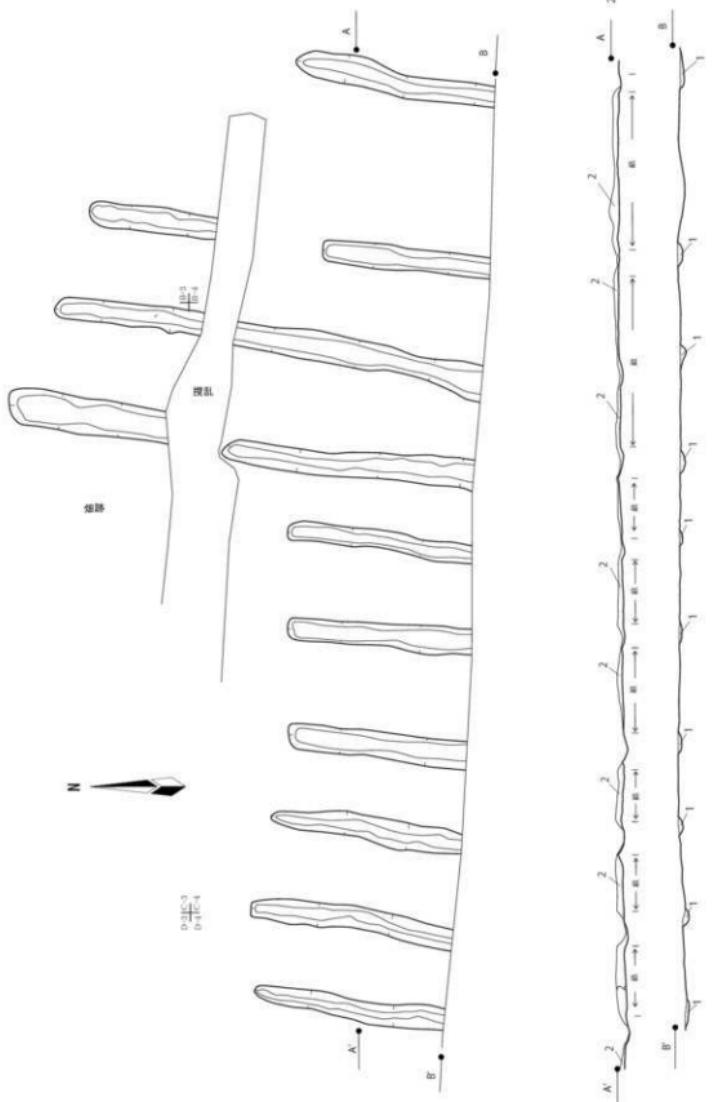
0 1/40 1m

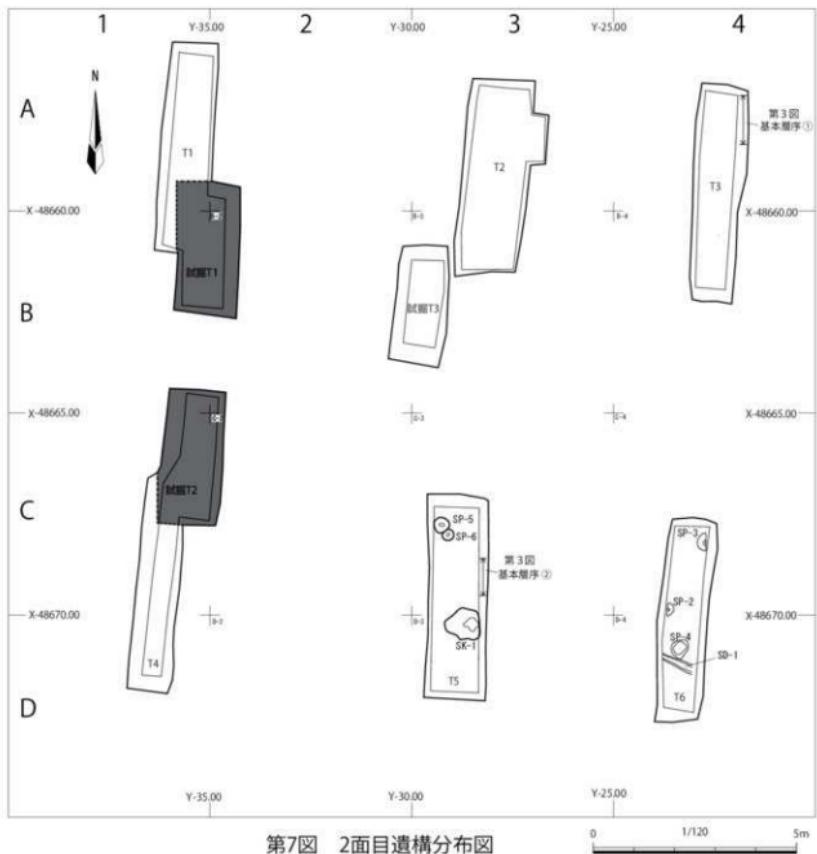


第5-2図 1面目遺構図

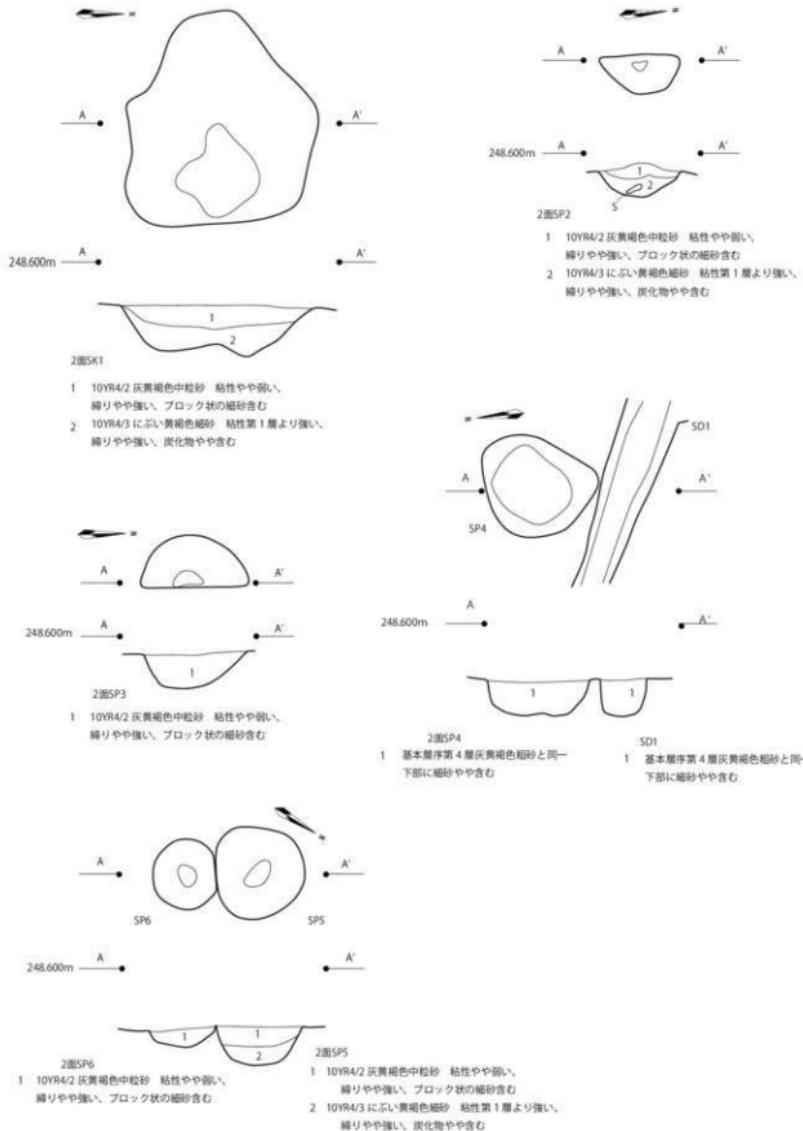
1m
1/40

第6図 番遺構平面図および断面図



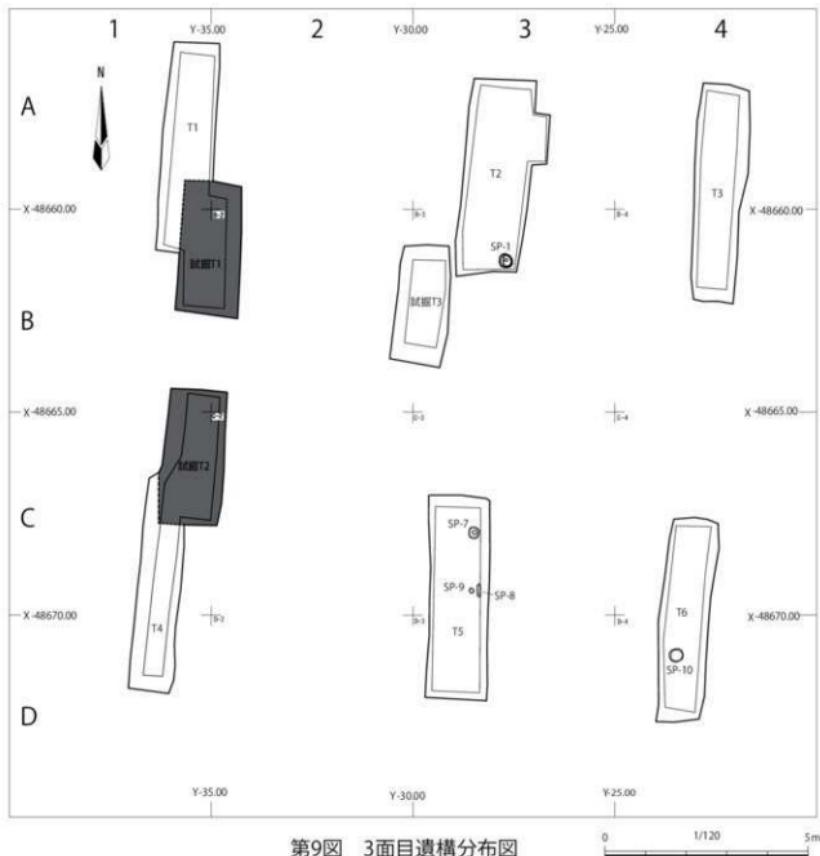


第7図 2面目遺構分布図

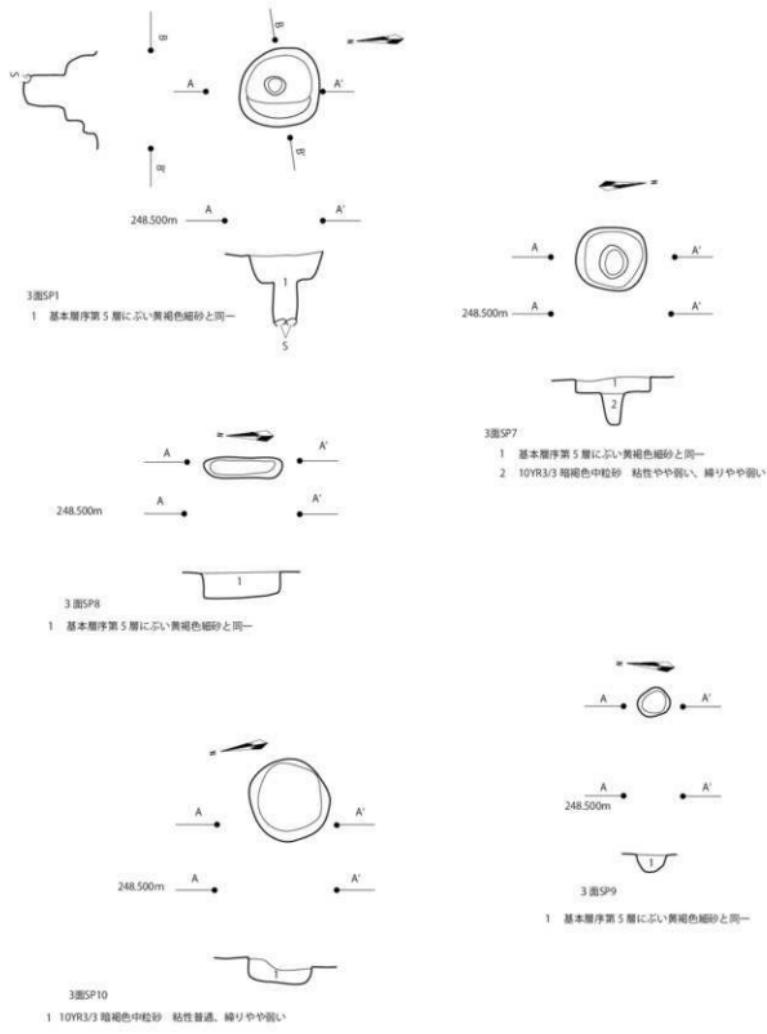


第8図 2面目遺構図

0 1/20 50cm

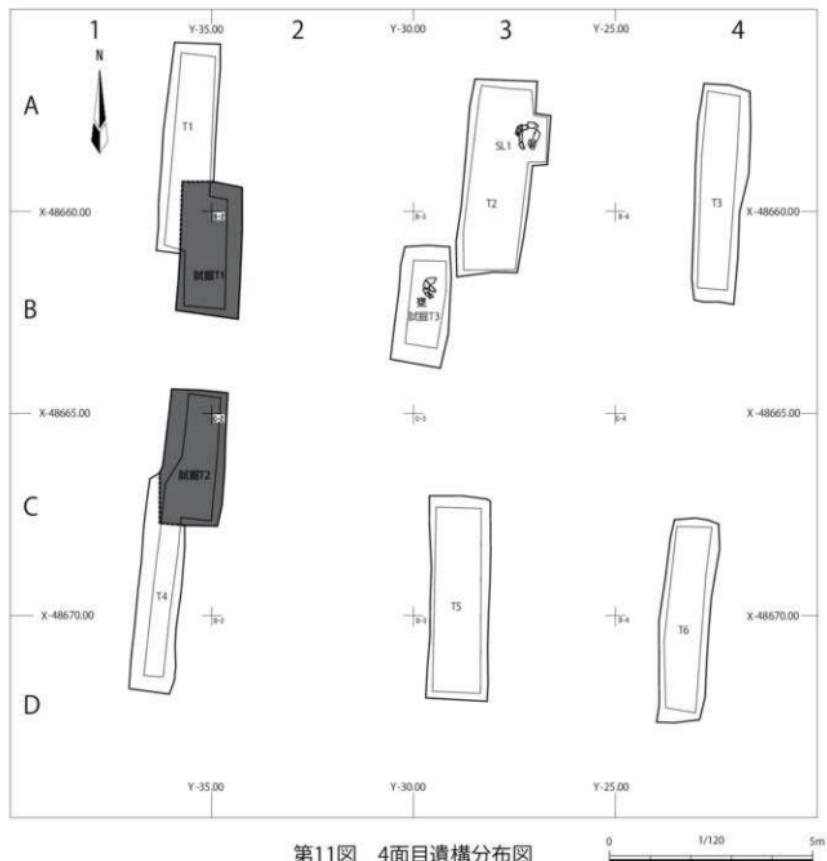


第9図 3面目遺構分布図

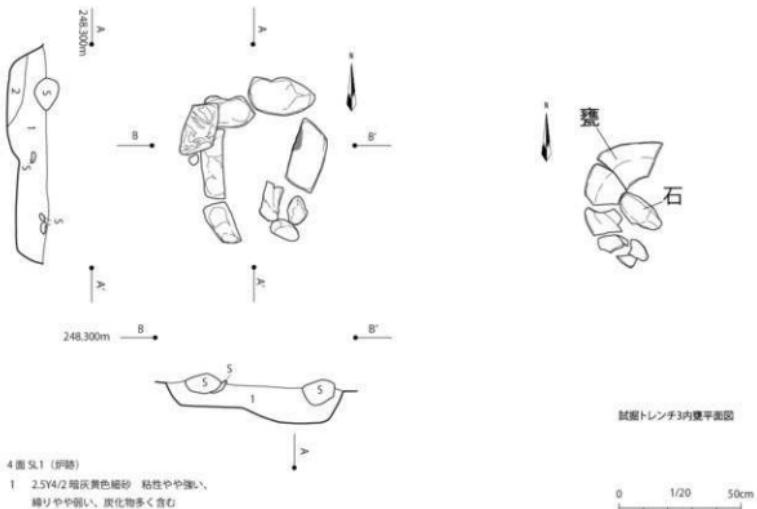


第10図 3面目遺構図

0 1/20 50cm



第11図 4面目遺構分布図



第 12 図 4 面目遺構図

第4節 出土した遺物

本発掘調査で出土した遺物には、中世～近世・近代までの土器、陶磁器、金属遺物、古銭、煉瓦がある。出土遺物では残存率 50%以上の土器の出土は少なく、小破片の出土が多くを占めた。出土量は、プラスチック収納箱（縦 49.5cm、横 34cm、高さ 16cm）5 箱である。

・1 面目（第 13 図）

1 は陶器製の蓋の破片である。見込みの中心部には欠損した把手が残り、底部からほぼ垂直に体部が立ち上がり口縁部は外側に開く。底部は回転糸切り痕がみられる。2・3 は陶器製の繩糸鍋である。いずれも諷訪式繩糸機のもので、年代は明治から大正時代である。黒線の鍋ものがより時代が新しいか。上面横の穴は蒸気管の取入れ口で、給蒸された蒸気は鍋下部に連なる細孔から噴出され、水温を上昇させることによって繩を柔らかくする。4 から 6 は磁器製の集緒器である。いずれも直径は 2cm 程度で、中央に糸を通すための穴が一つ空いており、側面に巡る溝は集緒器を機械に針金で固定するためのものである。4 には焼成前に縁辺部に青線で丸が重なって描かれているが、意图は不明。7 から 13 は煉瓦で 8 は耐火煉瓦である。7 は平両面に煉瓦長軸方向に直交する皺痕があり粒子が引きずられた痕が 6 条ある。刻印があるが判読できない。小口や長手面は滑らかに整形されている。8 は平両面がおおむね滑らかに整形されており片平面の上段に「(Y) KT」、下段に「32 27」と刻印がある。T のみ大きさが小さい。小口や長手面は滑らかに整形されており、長手面は赤く着色される。表面の鉄分が粒子状に酸化している。他の煉瓦に比べ重量が重い。9 は平両面がおおむね滑らかに整形されており、長軸方向に並行した調整痕が見られる。片平面に指頭痕が 2 つある。小口や長手面は滑らかに整形されている。他の煉瓦に比べ胎土が砂っぽい。10 は平両面に煉瓦長軸方向に直交する皺痕があり粒子が引きずられた痕が 9 条ある。「日本」と判読できる刻印がある。小口や長手面は滑らかに整形されている。11 は平両面に煉瓦長軸方向に直交する皺痕があり粒子が引きずられた痕が無数にある。また平片面の表面が溶融している。小口や長手面は滑らかに整形されている。両長手面の中央付近がやや絞られている。12 は平両面に煉瓦長軸方向に直交する皺痕があり粒子が引きずられた痕が無数にある。また平片面の表面が溶融している。片面に指頭痕がある。小口や長手面は滑らかに整形されているが、長手面に煉瓦を積み重ねたと思われる痕が 4 か所見られる。両長

手面の中央付近がやや絞られている。13は平両面に煉瓦長軸方向に直交する皺痕があり、「本」と判読できる刻印がある。小口や長手面は滑らかである。14は和釘である。先端はやや丸みを帯びているが細くなっている、頭部分は残存状態が良いが全体的に腐食が進んでいる。

・2面目（第14図）

15 土師質土器皿（かわらけ）である。器壁は薄い。底部は回転糸切り痕がみられる。近世の所産と思われる。

・3面目（第15図）

16・17は土師質土器皿（かわらけ）である。17は底部で一度垂直に体部が立ち上がった後、外反する。底部は回転糸切り痕がみられる。中世の所産と思われる。

・4面目（第16図）

18から20は土師質土器皿（かわらけ）である。器壁はいずれも底部から緩やかに外側に外反する。器厚は薄く、底部は回転糸切り痕がみられる。中世の所産と思われる。21・22は甕である。21は底部から5cmほどまではやや急に立ち上がり、その後は体部に向かって角度を変えながら緩やかに外側へ広がる。内部に沈線が1条めぐる。いずれも肩部や口縁部が欠損しているため確証を欠くが、中世の所産と思われる。23は擂鉢の体部破片である。3条の並行した痕が2箇所認められる。24・25は陶器製の香炉類の破片か。24の底部は部分的に釉がかかる。26から28は円盤状土製品であるが、用途は不明である。碁石か。側部は丁寧に面取りを施している。29は「元豊通宝」で1078年初鋤の宋銭である。

・令和2年試掘（土器集積）（第17図）

30は天目茶碗である。見込み部と外側口縁部から体部にかけて鉄釉がかかっている。31は染付端反碗である。中央部に「福」の文字が書かれている。正月行事の大福茶で使用されたものか。32はお鉢。底部中央に穿孔がされており体部中央から底部にかけて腐食が進んでいる。埋納される過程において穿孔されたものか。

・縫糸鍋、集緒器について

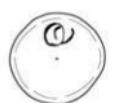
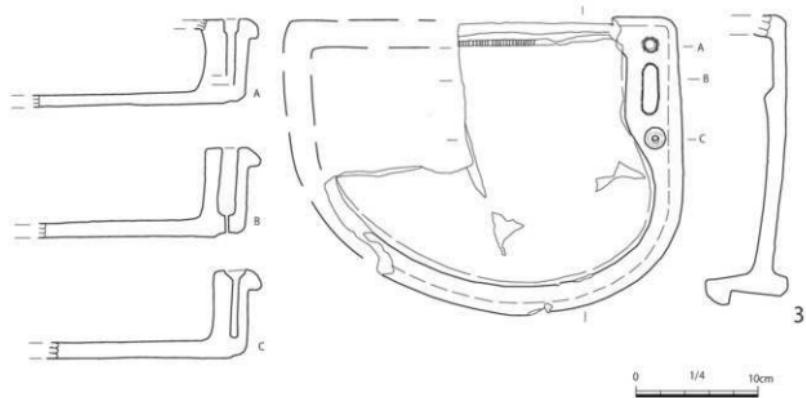
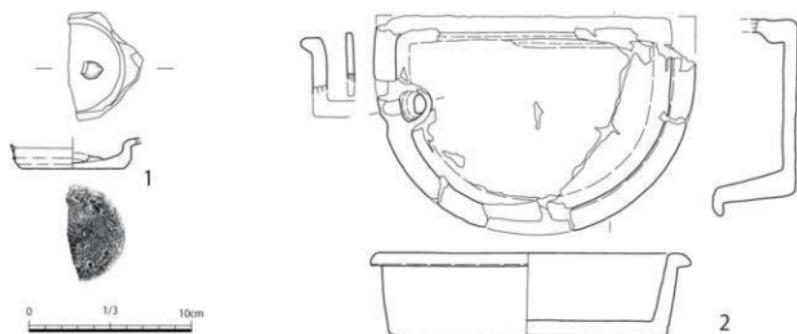
岡谷蚕糸博物館編（2020）についてまとめると、我が国で機械による製糸業が本格的に始まったのは明治時代初期であり、殖産興業政策の柱として群馬県に官営模範工場である富岡製糸場が操業したのが明治5年（1872）である。富岡製糸場にはフランス式の最新縫糸機が導入され、また前々年には前橋藩がイタリア式の縫糸法を取り入れている。このような蚕糸業の先進国であったフランスやイタリアの縫糸機を改良して明治8年（1875）に岡谷の武居代次郎によって諏訪式縫糸機が開発された。当初は2条縫りであったが、条数を増やしながら全国へ普及していった。諏訪式縫糸機には、採糸のため繭を熱湯にいれるのに使用する陶器製の煮繭鍋や縫糸鍋が備え付けられている。鍋の多くは長野県の高速で焼かれ出荷された。また細い糸を数本に撚るための磁器製の集緒器が縫糸鍋の上部に付けられた。

今回の発掘調査では8個の縫糸鍋片と多くの小破片が出土した。同時代に山梨を含め全国的に普及していた縫糸機は諏訪式縫糸機がほとんどを占め、現存している同機縫糸鍋と比較しても、形状や穴の位置が類似しているため、出土品も諏訪式縫糸機の付属品と考えられる。集緒器は12個出土した。

・煉瓦について

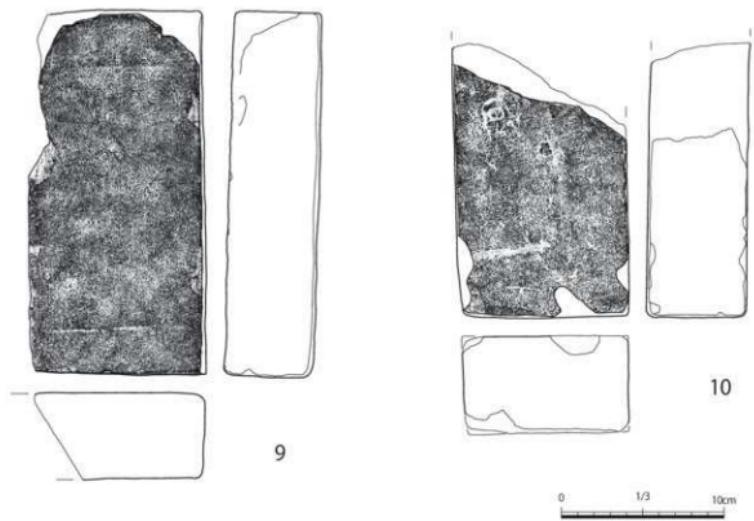
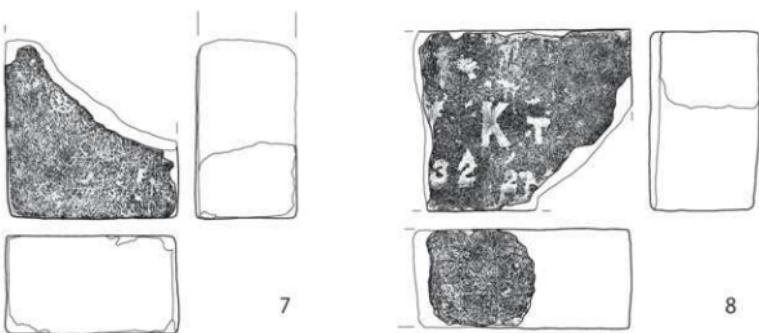
神戸市教育委員会編（2011）についてまとめると、我が国で煉瓦生産が本格的に始まったのは近世末期であり、用途は建築や土木など多岐に渡る。初期は瓦職人が製造していたが、明治21年（1888）に日本煉瓦製造株式会社が操業を開始すると機械製造による煉瓦が大量に生産された。機械製造による煉瓦は数個分を棒状に成形後にピアノ線で1個分に切断するため、長手平面にピアノ線によってできる特徴的な皺模様が見られる。

大正14年には日本標準規格（JES）第8号によって煉瓦寸法が規格化され、以後は長手210mm、小口100mm、厚さ60mmに統一された（石田真弥・関崇夫 2019）。刻印から読み取れる情報として、一般的に理解できるものとして図版番号8は大阪窯業株式会社製、図版番号10と13は日本煉瓦製造株式会社製の可能性がある。また、寸法から読み取れる情報として、出土した煉瓦の多くは長手が欠けているが、長手が残っているものについては先に挙げた大正14年以降の規格に一致するものがなく、これ以前に製造された可能性がある。

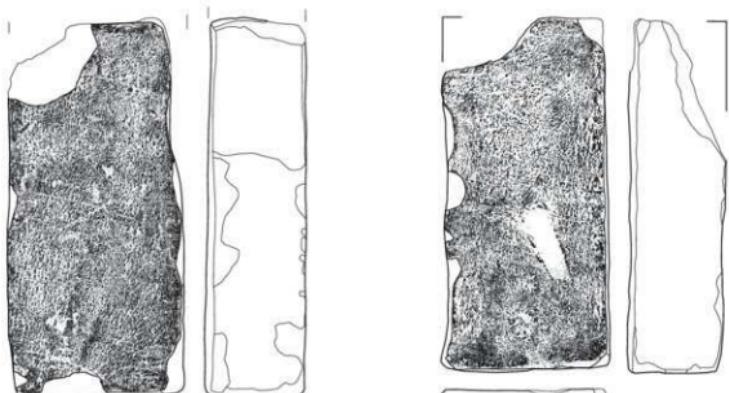


0 1/1 1cm

第 13-1 図 1 面目出土遺物

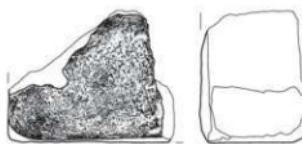


第 13-2 図 1 面目出土遺物



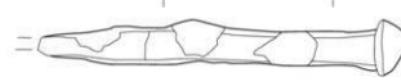
11

12



13

0 1/3 10cm

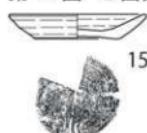


14

0 1/1 1cm

第13-3図 1面目出土遺物

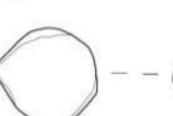
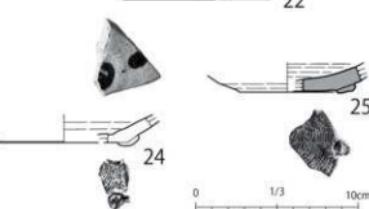
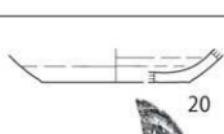
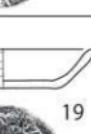
第14図 2面目



第15図 3面目



第16図 4面目

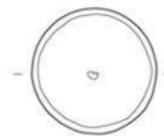


0 1/3 10cm



0 1/1 1cm

第17図 試掘



0 1/3 10cm

第14～17図 2・3・4面目・令和2年度試掘調査出土遺物

第3表 陶磁器・土器觀察表

第4表 煉瓦觀察表

第5表 鉄製品調査表									
出土点	番号	土器名	記号	種別	直徑	最大長	幅	厚さ	成形
8.11日 P.10	141	鐵火鉢	鋸五	火鉢	102	60	微側方	無	施土色
8.11日 P.10	142	鐵火鉢	鋸五	火鉢	110	60	不明	1段 12.27	施土色 無
9.11日 通56	109	鋸五		火鉢	223	53	不明	無	施土色
10.11日 通56	105	鋸五		火鉢	105	60	微側方	無	施土色
11.11日 P.11	114	鋸五		火鉢	227	114	53	側方	施土色
12.11日 P.13	101	鋸五		火鉢	214	56	側方	無	施土色
13.11日 一括	101	鋸五		火鉢	101	56	側方	無	施土色

第6表 古墳調査表									
出土点	番号	土器名	記号	種別	直徑	最大長	幅	厚さ	成形
6.11日 通57	143	鐵火鉢	鋸五	火鉢	76	76	1.2	0.6	7.5/15.4/5.5/1.5 無
6.11日 通57	144	鐵火鉢	鋸五	火鉢	76	76	1.2	0.6	7.5/15.4/5.5/1.5 無

第7表 令和2年度試掘調査出土物調査表									
出土点	番号	土器名	種別	直徑	最大長	幅	厚さ	(C)	成形
30.2.2日 通57	115	陶器	天目系	11.6	4.0	4.0	6.4	口凹	無
30.2.2日 通57	115	陶器	天目系	14.5	6.0	—	7.9	西附	無

卷之三

第5表 鐵製品銷量

備考	さび付着

卷之三

第6表 古錢觀察表

地圖	地圖說明	地圖說明	地圖說明	地圖說明
55号/2 河床地圖	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國
55号/3 河床地圖 變化した河岸	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國	18-19世紀 英國、美國 17世紀 印度、中國

卷之三

第七表 令和2年暫計

胎土色調	燒成	產地	制作時間	備考
50%2/頭赤褐色 Nb%白色 鐵化之青	燒成 燒	過山、臺灣 新竹、美國 江蘇常州 廣東中山、寧波	18-19世紀 19世紀 19世紀 19世紀	原燒 原燒 原燒 原燒
50%2/頭赤褐色 Nb%白色 鐵化之青	燒成 燒	過山、臺灣 新竹、美國 江蘇常州 廣東中山、寧波	18-19世紀 19世紀 19世紀 19世紀	原燒 原燒 原燒 原燒
50%2/頭赤褐色 Nb%白色 鐵化之青	燒成 燒	過山、臺灣 新竹、美國 江蘇常州 廣東中山、寧波	18-19世紀 19世紀 19世紀 19世紀	原燒 原燒 原燒 原燒

卷之三

302 頁目 論述 H.3 - GL1.15

31 2 電信 計算機 -GL1.15
32 2 電信 計算機 -GL1.15

第4章 総括

御陣屋遺跡の発掘調査では、1面目では近代の製糸業関連の遺物や同時代と思われる烟道構などの遺構、2面目では近世の陶磁器片、3面目では中世の土師質土器、4面目では中世と思われる炉跡や甕が見つかった。

・1面目の成果

1面目の北側では製糸場などの資材を廃棄したと考えられる遺構が複数見つかり、繩糸鍋や集緒器などの繩糸機に伴う遺物が出土した。これらの遺物はおよそ明治時代から大正時代の製造と考えられることから製糸場が操業していた年代と一致する。また製糸場との関連は不明だが複数の煉瓦片などが出土した。長手、小口、幅すべてが残存している煉瓦の寸法では大正14年以降の規格と一致するものがなく、これ以前に製造されたものと考えられ、これらも製糸場が操業していた年代と一致する。調査区北西隅では土管2基とコンクリート構が検出したが、製糸場に関わるものかは不明である。また、調査区南側については、北側に比べて遺構や遺物の検出も少なく、主な遺構としては烟跡と考えられる畝間と土坑2基であった。調査区北側と南側では土地利用に差があった可能性がある。

・2面目の成果

2面目では中央付近において試掘の際に江戸時代後期の地鎮跡と推定した土器集積遺構が検出されたほか、南側のトレンチ5とトレンチ6においていくつか遺構が検出された。しかしいずれの遺構でも遺物は伴わず、トレンチ掘りという調査方法の制限もあり、各遺物の関係については不明である。

・3面目の成果

3面目ではトレンチ2とトレンチ5で柱穴と思われる遺構(SP1、SP7)を検出したが、2基のみの検出ということでこの2基が同一の建物の柱穴であるか、またその建物の規模や性格などは不明である。他に遺構がいくつか検出されたが、これについても相関関係は不明である。3面目の下層には細砂が塊状に混じる硬化面が見られたが、その分布は北側に僅かでほとんどが南半分に広がっていた。当地点が微高地の南端であるため、土地利用をする際に高低差を克服しようとした可能性が考えられる。

・4面目の成果

4面目ではトレンチ2と試掘トレンチ3でそれぞれ炉跡と甕が検出された。他のトレンチで遺構は検出されなかったが、調査区全体に遺物の分布がみられ、出土量も1面目に次ぐものであった。遺物の様子から中世の遺構面と考えられるが3面目での遺物出土が僅かであったことから、3面目と4面目の時期差については不明である。

以上、遺構や遺物の密度が希薄であり、各遺構の関係が不明ながらも、これまで発掘調査があまりなされてこなかった市川大門市街地域において、人々の中世から近代にかけての活動の痕跡を見出したこと自体に当遺跡の意義を見出すことができると考えられる。

従来、人々が台地である平塩岡から現在の市川大門市街地に生活基盤を移したのは、近世に入ってからであると考えられてきた。しかし、今回の発掘調査を通じて中世には明確な人の活動痕跡が認められ、さらに扇状地の扇端部にある近年発掘された新町前遺跡では氾濫原の礫層の下に中世や古代の遺跡が発見されている。このことは当該地域を含む低地部における遺跡分布を見直す、さらには未発見の遺跡をどのように把握するのかという問題を提起させられた。今後は周知の範囲外に遺跡が多数存在する可能性を踏まえ、積極的に試掘調査や立会などの確認調査、民俗資料や文献や絵図などの歴史資料を再検討するなど、地域をあげて埋蔵文化財の広がりを把握していく必要がある。

《参考文献》

- 岡谷蚕糸博物館編 2020『未来に向けて 岡谷蚕糸博物館図録』
- 神戸市教育委員会編 2011『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』
- 石田真弥・関崇夫 2019『煉瓦寸法の変遷と組積技術の関連性に関する研究 群馬県内の煉瓦造建物を対象として』



御陣屋遺跡上空から、芦川および平塙岡を望む（令和4年2月27日撮影）（北西方向から南東方向を撮影）



御陣屋遺跡1面目完掘状況（令和4年2月27日撮影）（西方向から東方向を撮影）

写真図版 2



1面目 SP-1 半裁状況



1面目 SP-1 完掘状況



1面目 SP-2 半裁状況



1面目 SP-2 完掘状況



1面目 SP-4 検出状況



1面目 SP-4 完掘状況



1面目 SP-5 検出状況



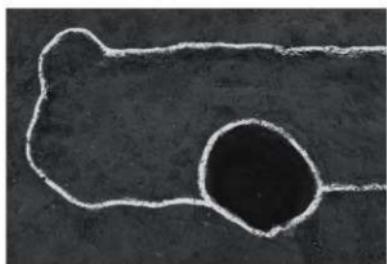
1面目 SP-5 完掘状況



1 面目 SP-6 検出状況



1 面目 SP-6 緑糸鍋出土状況



1 面目 SP-6 完掘状況



1 面目 SP-8 検出状況



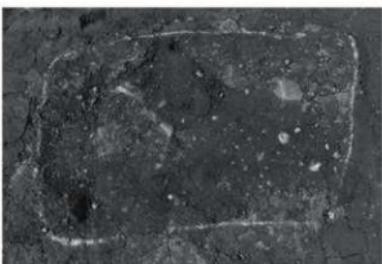
1 面目 SP-8 完掘状況



1 面目 SP-10 検出状況

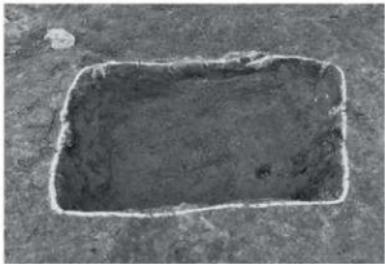


1 面目 SP-10 完掘状況



1 面目 SK-1 検出状況

写真図版 4



1 面目 SK-1 完掘状況



1 面目 SK-2 検出状況



1 面目 SK-2 完掘状況



1 面目 SK-3 検出状況



1 面目 SK-3 完掘状況



1 面目 SN-1 番跡 検出状況



1 面目 SN-1 番跡 完掘状況



1 面目 P-10 (緑糸鍋) 出土状況



1面目 P-13（緑釉鍋）出土状況



1面目 P-11（煉瓦）出土状況



1面目 土管出土状況



2面目 トレンチ 1 完掘状況



2面目 トレンチ 2 完掘状況



2面目 トレンチ 3 完掘状況

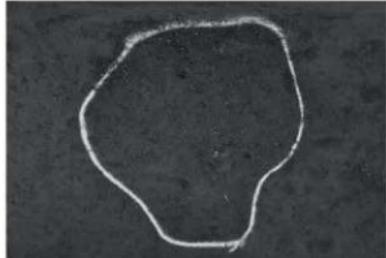


2面目 トレンチ 4 完掘状況



2面目 トレンチ 5 完掘状況

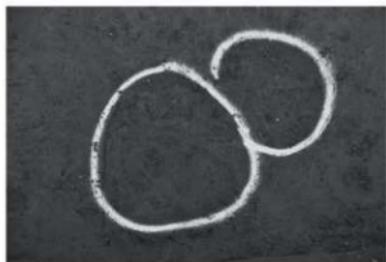
写真図版6



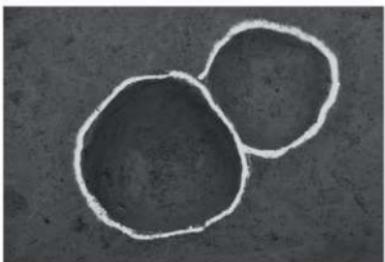
2面目 トレンチ 5 SK-1 検出状況



2面目 トレンチ 5 SK-1 完掘状況



2面目 トレンチ 5 SP-5.6 検出状況



2面目 トレンチ 5 SP-5.6 完掘状況



2面目 トレンチ 6 完掘状況



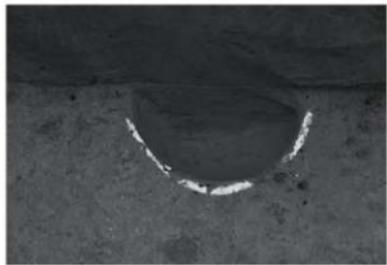
2面目 トレンチ 6 SP-2 検出状況



2面目 トレンチ 6 SP-2 完掘状況



2面目 トレンチ 6 SP-3 検出状況



2 面目 トレンチ 6 SP-3 完掘状況



2 面目 トレンチ 6 SP-4.5D-1 検出状況



2 面目 トレンチ 6 SP-4.5D-1 完掘状況



3 面目 トレンチ 1 完掘状況



3 面目 トレンチ 2 完掘状況



3 面目 トレンチ 2 SP-1 検出状況



3 面目 トレンチ 2 SP-1 完掘状況



3 面目 トレンチ 3 完掘状況

写真図版8



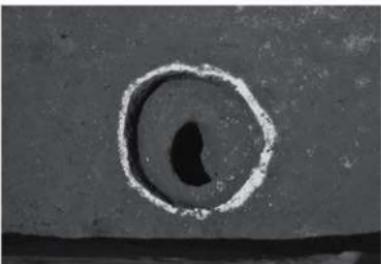
3面目 トレンチ4 完掘状況



3面目 トレンチ5 完掘状況



3面目 トレンチ5 SP-7 検出状況



3面目 トレンチ5 SP-7 完掘状況



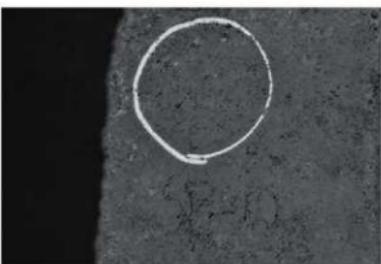
3面目 トレンチ5 SP-8.9 検出状況



3面目 トレンチ5 SP-8.9 完掘状況



3面目 トレンチ6 完掘状況



3面目 トレンチ6 SP-10 検出状況



3面目 トレンチ 6 SP-10 完掘状況



4面目 トレンチ 1 完掘状況



4面目 トレンチ 2 炉跡の微細図作成状況



4面目 トレンチ 2 炉 検出状況



4面目 トレンチ 2 炉 半裁状況



4面目 トレンチ 2 炉 完掘状況



4面目 トレンチ 3 完掘状況



4面目 トレンチ 4 完掘状況

写真図版 10



4面目 トレンチ 5 完掘状況



4面目 トレンチ 5 P-1 (かわらけ) 出土状況



4面目 トレンチ 6 完掘状況



4面目 トレンチ 6 Z-1 (古銭) 出土状況



試掘トレンチ 3 瓢出土状況



試掘トレンチ 3 瓢碟取外し状況



トレンチ 3 土層堆積状況



トレンチ 5 土層堆積状況



調査着手前状況



表土剥ぎ状況



1面目 遺構面精査風景



1面目 空中写真撮影状況



2面目 遺構面精査風景



埋戻し状況



埋戻し完了状況



本格的整理（遺構トレース）作業状況

写真図版 12

1面目 (1)



4



5



6



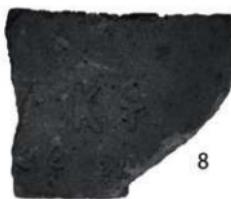
2



7



3



8



9



10



11

※縮尺は任意

1 面目 (2)



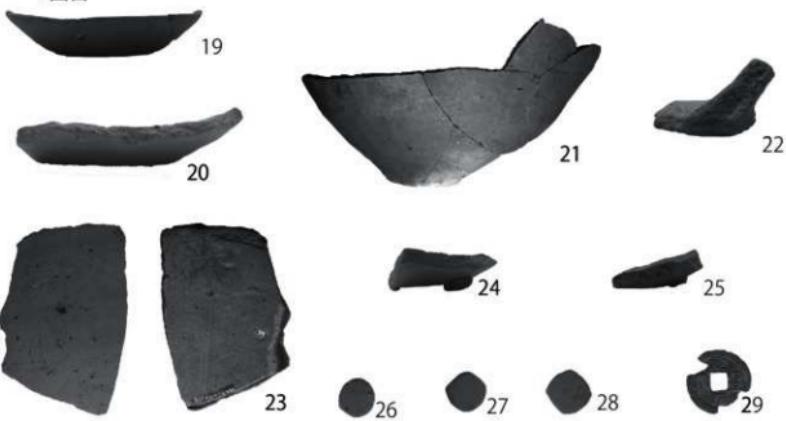
2 面目



3 面目



4 面目



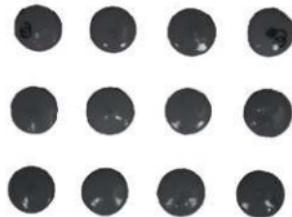
試掘



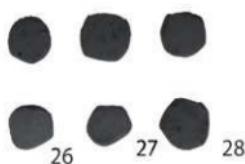
※縮尺は任意



1 面目出土遺物①



1 面目出土遺物②集緒器



4 面目出土遺物土製品

※縮尺は任意

報告書抄録

ふりがな	ごじんやいせき							
書名	御陣屋遺跡							
副題	市川大門郵便局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第341集							
編著者名	内田祥一							
発行者	山梨県観光文化部・日本郵便株式会社							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923 TEL:055-266-3016							
発行日	2023年3月17日							
ふりがな跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ごじんやいせき 御陣屋遺跡	西八代郡市川三郷町 市川大門 234-5	19346	一	35° 66° 36°	138° 56° 97°	20220323 ~ 20220527	222m ²	郵便局庁舎建設工事のため
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	集落跡	中世 近世 近代	炉・柱穴・烟	土師器・陶磁器・煉瓦			中世から近代にかけての 遺構確認面が4面確認さ れた。	
要約	本遺跡は市川三郷町市川大門地域の中心部に所在する。周辺には江戸時代後期に設置された市川代官所跡があり明治時代以降は製糸場が存在した。今回調査では、代官所との関わる遺構や遺物は発見されなかったが、市川大門市街地の中心部から中世の遺物や遺構が発見されたのは初めてである。中世の甕や井跡、近世の土器集積、近代の製糸場にかかる遺物や痕跡が発見され、当地域が中世から近現代まで人の営みがなされていた地域であることがわかった。							

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第341集

御陣屋遺跡

市川大門郵便局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 2023年3月9日 自刷

発行日 2023年3月17日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発行 山梨県観光文化部・日本郵便株式会社

印刷 株式会社 峠南堂印刷所

